

琉球大学学術リポジトリ

教職員の高齢者理解に関する調査研究 ―教育老年への招待―

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2011-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下地, 敏洋 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19033

教職員の高齢者理解に関する調査研究 －教育老年学への招待－

下地 敏洋

A Study on the Understanding of the Elderly among Teachers: An Introduction to Educational Gerontology

Toshihiro SHIMOJI

Summary

This article aims at considering the possibility of establishing comprehensive gerontology curriculums in Japan's universities based on the results of the questionnaire of the understanding of the elderly and the consciousness of the later years of teachers. Japan is a mature society with an elderly population, aged 65 years or over, of 2,901 million accounting for 22.7 percent of the population. The Japanese government has recognized the importance and the necessity of interdisciplinary research programs such as gerontology in college and graduate levels. However, there are few universities with gerontology programs in Japan.

The results show that teachers involved don't understand the real aging process and the elderly and that the importance and the necessity of studying gerontology as university curriculum in their early life stages. In the U.S., the Gerontological Society of America and the Association for Gerontology in Higher Education have already been established and 37 universities have masters programs and five universities have doctoral programs in gerontology. This is the best time for Japanese universities to set up gerontology programs to improve the understanding of the real aging process and QOL, and to decrease discrimination and prejudice toward senior citizens. Establishing gerontology programs at university levels is important to understand the real aging process and improving our subjective well-being in later years.

本稿は、平成22年度教員免許更新講習において、著者が担当した「教育の最新事情」を受講した沖縄県の教職員に対してアンケート調査を実施し、その結果分析に基づき、教職員の高齢者に対する理解及び高齢期に対する意識の特徴を検討することを目的とする。

1. はじめに

内閣府の発表(2010年)によると、我が国の総人口に占める65歳以上の高齢者の割合は22.7パーセント(2009年)となり、超高齢社会を迎えている。また、65歳以上の人口も2,901万人(女性

1,661万人、男性1,240万人)を超え、過去最高の人数となった。この傾向は今後も続くと考えられ、平成25年(2013年)、我が国の総人口に占める65歳以上の高齢者は25.21パーセントで4人に1人、2030年には31.8%で3.2人に1人、2055年には40.5パーセントで2.5人に1人が65歳以上になるものと予測される。75歳以上の高齢者が総人口に占める割合も上昇を続け、2055年には26.5%となり¹⁾、4人に1人が75歳以上の高齢者になるものと予測される。

また、平均寿命も1935年の男性46.92歳、女性49.63歳から、2008年には男性79.29歳、女性86.

05歳となった。2055年に、男性83.67歳、女性90.34歳になるものと予測され¹⁾、我が国は世界のどの国も経験したことの無い超高齢社会を短期間で迎えることになる。

このような状況の中で、全国の小学校、中学校、高等学校で高齢者あるいは老化に関する正規の授業が実施されている報告はない。学習指導要領(高等学校)では、保健(保健体育)の「生涯を通じる健康」と生活と福祉(家庭科)の「高齢者の自立生活支援と介護」などで指導することが示されているものの、高齢者及び高齢期を理解させることが十分とは言えないのが実情である。

また、国内の大学では、老年医学の講座が全国80の医科大学あるいは医学部の約4分の1で設置されているが、学際的な学問としての老年学は、大学院レベル又は学部レベルでも講座あるいは研究科として設置されているものは少ない²⁾。現在、高齢者や老化に関する講義科目を設置している大学は桜美林大学のみであるが、修士課程及び博士課程を設置しており、老年学に従事する研究者や実践家を養成している。また、東京大学ではジェロントロジーセンターを設置し、大学院レベルの老年学研究をスタートさせたばかりである。

一方、米国においては、1965年にThe Older Americans Actが通過して学際的な老年学教育が開始された。現在、学部課程が31大学、修士課程が37大学、博士課程が5大学で設置されている。1964年、南カリフォルニア大学に米国退職者協会の寄付金によりアンドラス・ジェロントロジーセンターが設立され、1975年に大学院を創設し、1989年より博士号を授与している。現在、学部課程、修士課程、博士課程を設置して老年学教育及び研究の最先端にあり、世界の老年学に関する研究を牽引している。また、米国老年学協会、その傘下にある高等教育老年学協会、北テキサス大学を拠点とする全国高齢化教育学習学会の設立により、大学だけでなく幼・小・中・高校までの高齢者や老化に関する教育を生涯教育という視点から学ぶ機会が提供されている²⁾。

高齢期は、生き続ける限り誰もが経験する重要なライフステージであるにも関わらず、老化の過程を生涯発達の視点から捉えることの欠如または衰退というイメージが先行し、正しい老化の過程

を学ぶ機会が十分とはいえない。このことが、老人差別や偏見を生み出すばかりでなく、自己の高齢期のライフステージにおけるQOLにも少なからず影響を与えるものと考えられる。柴田(1999年)も、「老年学は加齢学や高齢者に関する問題のみでなく、むしろ生涯発達理論や世代間問題をも研究する学問といえよう。」と述べている³⁾。このことは、老年学は学際的な学問であるばかりでなく教育機関においても積極的に教えることの必要性和重要性を示唆しているものと考えられる。

高齢者や高齢期について十分な教育の機会が与えられていない教育現場で、幼児児童生徒に直接接する教職員の影響力は大きいものと考えられる。そのため、教職員の高齢者に対する理解及び高齢期に対する意識の特徴について明らかにすることは、今後、教育現場に教育老年学の導入することの必要性を検討することに寄与するものと考え、本調査を実施した。

従って、本稿はアンケート調査を通して、教職員の高齢期に関する考え方の特徴の一面を明らかにすることで、教育現場において幼児児童生徒が正しい老化の過程と高齢期を学ぶ教育老年学の可能性について報告することを目的としている。

II. 老年学及び教育老年学について

エイジング大事典によると、老年学(Gerontology)には次のような内容が包含されている。つまり、①生涯から捉えた生物学的、心理学的、社会学的な老化や高齢期に関する科学研究、②高齢者に的を絞る高齢期における適応などに関する中高年者に関する科学研究、③老いの意味を多角的に考える人文科学(歴史学、哲学、文学など)の視点から捉えた研究、そして④高齢者に関するデータを政策などに生かすなどの中高年者に有益な知識の応用である⁴⁾。

まとめてみると、老年学とは、老化に対して、医学、生物学、心理学、および社会学などの各領域から老年期を多面的に解明していくとともに、老年期に直面する身体的または精神的問題等に有機的、かつ総合的に対処することで人生の意味を科学的に探究する学際的な研究領域であるといえる。

しかしながら、我が国における老年学の普及に

は多くの課題がある。柴田（2007年）は、我が国における老年学の課題として、老年学の応用の遅れを指摘している⁵⁾。このことは、研究者の中に基礎研究を応用することに対する価値観の低さや応用のための学問の重要性が認知できなかったことを要因として挙げている。また、老年学は、学際的な学問であるばかりでなく、成熟した社会において発達する学問であるため、欧米と比較して高齢化社会が急激に進んだ我が国ではその必要性は共通理解されているにも関わらず、学問として発達する機会を逸してきたとも考えられる。老化を生涯発達の視点から捉え、人生の最終ステージにおいて、自己の人生を統合し、人生の価値や意味を高めるために必須であると考えられるが、超スピードで高齢社会に突入した我が国においては、高齢者や老化に対する偏見やマイナスイメージが先行してしまい、老年学を受け入れるのに時間を要する学問であるといえると考えられる。

教育老年学とは、「高齢化と生涯学習の問題を、エイジングと成人の学びとを、より根本的な次元から結びつける新しい学問分野である。それは、高齢者への生涯学習という枠組みを超える体系でもある。老いの価値を探る学問でもある。教育という視点から人生の後半部を見つめる学問でもある。」⁶⁾

つまり、教育老年学とは老化と生涯教育をクロスさせた学問であり、老化を生涯発達の視点から見つめることで、人生の価値や生き方についても考える機会を提供する学問である。

Ⅲ. 研究方法

調査対象者は、平成22年度教員免許更新講習において、著者が担当した「教育の最新事情」を受講した沖縄県の教職員の224名（男性115名、女性109名）に対して実施した。回収率は、79%（男性88名、女性89名、計177名）であった。

調査項目は、基本属性及び高齢者の理解度並びに調査対象者の老後への準備に関するものとした。基本属性は、①性、②年代、③校種などであった。高齢者の理解度は①65歳以上の高齢者の大多数は、認知症（記憶が落ちたり、ボケたりする）である、②高齢期では、耳や目などのいわゆる五官が衰える傾向にある、③ほとんど全ての高齢者が、性に対する興味も関心ももっていない、④高齢期で、

心肺機能（肺活量）が低下する傾向がある、⑤少なくとも高齢者の10名中1人が、ナーシングホームや高齢者住宅等の長期滞在型施設で生活している、⑥高齢者のドライバーは、65歳以下のドライバーと比べて交通事故が少ない、⑦ほとんどの高齢者は、若い人ほど効率よく働くことができない、⑧高齢者の約80%は、通常の生活行動ができる十分は健康状態にある、⑨ほとんどの高齢者は、自分自身の考え方に固執しており、柔軟性がない、⑩ほとんどの高齢者の反応時間は、遅くなる傾向がある、⑪大多数の高齢者は、社会的に孤立しており、孤独である、⑫高齢の労働者は、若い労働者と比べて事故が少ない、⑬大多数の高齢者は、政府が定めている貧困基準を下回る収入しか得ていない、⑭大多数の高齢者は、何らかの仕事に従事している、又はしたいと思っている、⑮高齢者は、年齢とともにより宗教に興味・関心が高くなっていく、であった（資料1）

調査は、教員免許更新講習が行われた教室で実施した。出席確認後、講義が始まるまでの20分の間に調査目的及びデータの活用法を説明し、協力を賛同できる者だけが休憩時間を利用して回答し、講義終了後に提出することを依頼した。

調査は平成22年8月に実施した。

分析は、回答内容から、協力者が記述した内容を取り出し、回答内容を全て原文のまま記述し、類似した内容を集め（小分類）、代表的な内容で表示し、さらに分類（大分類）、命名し、高齢期に対する意識を推測した。

Ⅴ. 結果

文中、“ ”は回答内容を、小分類の命名を< >で、大分類の命名を< >で表す。

1. 自分自身が優れていることについて

「自分自身が優れていることについて」に関する質問は、「あなたと高齢者を比較して、あなたが優れている点は何だと思えますか。」であった。回答例として、「身体的に活発に活動がしやすい点」については、回答内容を“身体的に活発に活動”とし、<心身の体力>に分類し、<身体力>に大分類、命名した。

その結果、回答内容は、一人で複数回答した者もあり253項目取り出すことができ、同じ内容のも

のをまとめて小分類では31項目、大分類では6項目となった。

大分類の6項目は、〈身体能力〉、〈思考能力〉、〈適応能力〉、〈経済力〉、〈希望〉、〈挑戦〉であった。

また、男女共通する項目は、〈身体能力〉、〈思考能力〉、〈経済力〉の3項目で、男性には〈適応能力〉と〈希望〉、女性には〈挑戦〉が加わっていた。

2. 高齢者が優れていることについて

「高齢者が優れていることについて」に関する質問は、「あなたと高齢者を比較して、高齢者が優れている点は何だと思いますか。」であった。

回答内容は、一人で複数回答した者もあり134項目取り出すことができ、同じ内容のものをまとめて小分類では42項目、大分類では6項目となった。

大分類の6項目は、〈知識・経験〉、〈人生を楽しむ〉、〈冷静〉、〈バランスの良さ〉、〈判断力〉、〈経済力〉、〈社会的貢献〉であった。

また、男女共通する項目は、〈知識・経験〉、〈人生を楽しむ〉、〈冷静〉、〈社会的貢献〉の4項目で、男性には〈経済力〉、女性には〈判断力〉が加わっていた。

3. 高齢者について

「高齢者について」は、各質問項目に正誤で回答してもらった。

正答率は、次の通りである(表1)。

これらの質問は、高齢者に対する理解と偏見を検討する上から、重要であると考え実施した。質問項目と結果の特徴は、次のとおりである。(表1) この調査は、講義で老年学について説明する前に実施した。

本調査の結果は、アンケート調査の実施計画や対象者の年齢など基本属性が研究を目的としてデータが収集されていないため、先行研究との厳密な比較はできないが、今後の研究計画のために概要を把握することは有益であるように考えられる。先行研究では、日本の中壮年者は米国の対象者よりもはるかに強い老人差別をもっているが明確にされている²⁾。今回はアンケート調査結果も、高齢者が十分に理解されているとは言えず、同様の結果となっている。

これまでの先行研究においても、女性の回答率が男性を比較して高くなる傾向が報告されるが、今回は男性の回答率が高い結果となっている。各質問における正答率は、質問1、2、10の3項目において90%を上回り、他の12項目では90%を下回っている。特に、質問6(男性15.9%、女性7.9%)、

表1 加齢の事実をめぐる Palmore のクイズと正答率

番号	質問項目	正答率(%)					
		男性	女性	30歳代	40歳代	50歳代	合計
1	65歳以上の高齢者の大多数は、認知症(記憶が落ちたり、ボケたりする)である。	100	94.6	93.5	98.3	96.3	95.5
2	高齢期では、耳や目などのいわゆる五感が衰える傾向にある。	94.3	98.9	95.7	96.6	100	96.7
3	ほとんど全ての高齢者が、性に対する興味も関心ももっていない。	96.6	86.5	90.2	91.4	96.3	91.5
4	高齢期で、心肺機能(肺活量)が低下する傾向がある。	84.1	78.7	81.5	82.8	77.8	81.4
5	少なくとも高齢者の10名中1人が、ナーシングホームや高齢者住宅等の長期滞在型施設で生活している。	50	52.8	50	55.2	48.1	51.4
6	高齢者のドライバーは、65歳以下のドライバーと比べて交通事故が少ない。	15.9	7.9	10.9	13.8	11.1	11.9
7	ほとんどの高齢者は、若いほど効率よく働くことができない。	63.6	47.2	53.3	60.3	51.9	55.4
8	高齢者の約80%は、通常の生活行動ができる十分な健康状態にある。	66.7	61.8	60.9	58.6	77.8	62.7
9	ほとんどの高齢者は、自分自身の考え方に固執しており、柔軟性がない。	60.2	58.4	59.8	69	37	59.3
10	ほとんどの高齢者の反応時間は、遅くなる傾向がある。	90.9	92.1	91.3	94.7	88.9	91.5
11	大多数の高齢者は、社会的に孤立しており、孤独である。	79.5	80.9	78.3	87.9	70.4	80.2
12	高齢の労働者は、若い労働者と比べて職場での事故が少ない。	27.3	30.3	22	32.8	44.4	28.8
13	大多数の高齢者は、政府が定めている貧困基準を下回る収入しか得ていない。	54.5	51.7	53.3	53.4	51.9	53.1
14	大多数の高齢者は、何らかの仕事に従事している、又はしたいと思っている。	79.5	77.5	76.1	72.4	77.8	75.1
15	高齢者は、年齢とともに宗教に興味・関心が高くなっていく。	58	69.7	66.3	58.6	66.7	63.8
	合計平均	67.9	65.5	65.5	68.3	66.4	66.6

注：奇数番号は誤り、偶数番号は正解となる

出典：Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH、1988、p.423

質問 12 (男性 27.3%、女性 30.3%) の 2 項目において、男女とも正答率が 50% を下回っている。また、質問 5 (男性 50.0%、女性 52.8%)、質問 13 (男性 54.5%、女性 51.7%) で正答率が 50% 前後となっている。

4. 高齢期に対する意識について

「高齢期に対する意識について」に関する質問は、①「今私にとって人生で一番大切なことは、・・・」、②「私が 70 歳になったとき、私にとって一番大切なことは、多分・・・」、③「年を重ねることで楽しみにしていることは、・・・」、④「年を重ねることで最も心配していることは、・・・」、⑤「もし、私の両親が自分自身の世話ができなくなったら、私は・・・」、⑥「もし、私が自分自身のこと私の両親が自分自身の世話ができなくなったら、私は・・・」、⑦「あたしが高齢者のことを考えたとき、脳裏に浮かぶ言葉は・・・」、⑧「私は心身共に充実した生活を送るために、現在、次のようなことをしている。」であり、自らの言葉で記述してもらった。

(1) 今私にとって人生で一番大切なこと

「今私にとって人生で一番大切なことは」の問いに対し、回答内容は、一人で複数回答した者もあり 191 項目取り出すことができ、同じ内容のものをまとめて小分類では 43 項目、大分類では 13 項目となった。

大分類の 13 項目は、〈家族〉、〈仕事〉、〈趣味〉、〈人間関係を広げる〉、〈健康〉、〈人生を楽しむ〉、〈夫婦円満〉、〈経済力〉、〈信仰〉、〈愛〉、〈子どもの成長〉、〈挑戦〉、〈社会的貢献〉であった。

また、男女に共通する項目は、〈家族〉、〈仕事〉、〈趣味〉、〈人間関係を広げる〉、〈健康〉、〈人生を楽しむ〉、〈夫婦円満〉、〈経済力〉、〈社会的貢献〉の 9 項目で、女性には〈信仰〉、〈愛〉、〈子どもの成長〉、〈挑戦〉の 4 項目が加わっていた。

(2) 私が 70 歳になったとき、私にとって一番大切なこと

「私が 70 歳になったとき、私にとって一番大切なことは多分」の問いに対し、回答内容は、一人で複数回答した者もあり 199 項目取り出すことができ、同じ内容のものをまとめて小分類では 32 項

目、大分類では 11 項目となった。

大分類の 11 項目は、〈体力・健康〉、〈家族〉、〈夫婦円満〉、〈コミュニケーション〉、〈貯蓄・経済力〉、〈人生を楽しむ〉、〈趣味〉、〈文化の伝承〉、〈平和〉、〈介護〉、〈死〉であった。また、男女共通する項目は、〈体力・健康〉、〈家族〉、〈夫婦円満〉、〈コミュニケーション〉、〈人生を楽しむ〉、〈趣味〉、〈死〉の 7 項目で、男性には〈文化の継承〉、〈平和〉、〈介護〉の 3 項目、女性には〈役割〉の 1 項目が加わっていた。

(3) 年を重ねることで楽しみにしていること

「年を重ねることで楽しみにしていることは」の問いに対し、回答内容は、一人で複数回答した者もあり 197 項目取り出すことができ、同じ内容のものをまとめて小分類では 33 項目、大分類では 8 項目となった。

大分類の 8 項目は、〈自由な時間・ゆとり〉、〈家族の絆〉、〈趣味〉、〈子どもの成長〉、〈人生の統合・挑戦〉、〈人間的広がり〉、〈仕事に生きる〉、〈考えたことがない〉であった。

また、全ての項目は男女に共通していた。

(4) 年を重ねることで最も心配していること

「年を重ねることで最も心配していることは」の問いに対し、回答内容は、一人で複数回答した者もあり 190 項目取り出すことができ、同じ内容のものをまとめて小分類では 21 項目、大分類では 9 項目となった。

大分類の 9 項目は、〈子や孫の将来〉、〈健康・病気・介護〉、〈貯金・収入〉、〈老後の人生〉、〈社会福祉〉、〈社会環境の変化〉、〈家族〉、〈特になし〉、〈考えていない〉であった。

また、男女に共通する項目は、〈子や孫の将来〉、〈健康・病気・介護〉、〈貯金・収入〉、〈老後の人生〉、〈社会福祉〉、〈家族〉、〈特になし〉、〈考えていない〉での 8 項目で、女性には〈社会環境の変化〉が加わっていた。

(5) 両親が自分自身の世話ができないこと

「もし、私の両親が自分自身の世話ができなくなったら、私は」の問いに対し、回答内容は、一人で複数回答した者もあり 179 項目取り出すことができ、同じ内容のものをまとめて小分類では 15 項目、大分類では 7 項目となった。

大分類の 7 項目は、〈介護・世話〉、〈施設〉、

＜同居＞、＜親の気持ち次第＞、＜デイ・サービス＞、＜家族で話し合う＞、＜気にしない＞であった。

また、男女に共通する項目は、＜介護・世話＞、＜施設＞、＜同居＞、＜親の気持ち次第＞、＜デイ・サービス＞、＜家族で話し合う＞で、男性には＜気にしない＞が加わっていた。

(6) 自分自身のことができなくなること

「もし、私が自分自身のことができなくなったら、私は」の問いに対し、回答内容は、一人で複数回答した者もあり 161 項目取り出すことができ、同じ内容のものをまとめて小分類では 20 項目、大分類では 6 項目となった。

大分類の 6 項目は、＜施設で生きる＞、＜家族で介護＞、＜死＞、＜福祉を利用して自立＞、＜健康維持＞、＜わからない＞であった。

また、全ての項目において男女に共通していた。

(7) 高齢者から脳裏に浮かぶ言葉

「私が高齢者のことを考えたとき、脳裏に浮かぶ言葉は」の問いに対し、回答内容は、一人で複数回答した者もあり 167 項目取り出すことができ、同じ内容のものをまとめて小分類では 56 項目、大分類では 16 項目となった。

大分類の 16 項目は、＜家族・夫婦円満＞、＜介護・ケア＞、＜精神的ゆとり＞、＜老後＞、＜貯蓄・経済力＞、＜あきらめ＞、＜不安＞、＜健康＞、＜人生の統合・満足＞、＜第二の人生・挑戦＞、＜尊敬＞、＜人生の回想＞、＜死＞、＜病気＞、＜社会参加＞、＜ない＞であった。

また、男女に共通する項目は、＜家族・夫婦円満＞、＜介護・ケア＞、＜精神的ゆとり＞、＜老後＞、＜貯蓄・経済力＞、＜あきらめ＞、＜不安＞、＜健康＞、＜人生の統合・満足＞、＜第二の人生・挑戦＞、＜尊敬＞、＜死＞、＜ない＞の 13 項目で、男性には＜人生の回想＞の 1 項目、女性に＜病気＞、＜社会参加＞の 2 項目が加わっていた。

(8) 心身共に充実した高齢期を送ること

「私は心身共に充実した生活を送るために、現在、次のようなことをしている」の問いに対し、回答内容は、一人で複数回答した者もあり 214 項目取り出すことができ、同じ内容のものをまとめて小分類では 39 項目、大分類では 14 項目となった。

大分類の 14 項目は、＜家族との時間＞、＜運

動・健康＞、＜貯蓄＞、＜人生設計＞、＜趣味＞、＜生活習慣＞、＜仕事＞、＜考える余裕がない＞、＜メンタルヘルス＞、＜バランス重視＞、＜人間関係を広げる＞、＜社会福祉を学ぶ＞、＜社会貢献＞、＜特になし＞であった。

また、男女に共通する項目は、＜家族との時間＞、＜運動・健康＞、＜貯蓄＞、＜人生設計＞、＜趣味＞、＜生活習慣＞、＜仕事＞、＜考える余裕がない＞、＜メンタルヘルス＞、＜バランス重視＞、＜人間関係を広げる＞、＜特になし＞の 12 項目で、女性には＜社会福祉を学ぶ＞、＜社会貢献＞の 2 項目が加わっていた。

VI. 考察

教職員の高齢者に対する理解及び高齢期に対する意識に関する特徴について考察する。

高齢者の身体的及び精神的機能の現状に関する質問において、高齢者の現状が十分に理解されていないことが考えられる。正答率が合計 66.3%となっており、3 割強が誤回答で正しく理解されていない。このことは、高齢者に対する偏見や差別意識と関連があることも考えられる。男女比においては、男性 67.9%、女性 65.5%で女性の回答率が男性よりも低くなっている。これまでの先行研究においても、女性の回答率が高くなる傾向となっているが、今回は異なる結果となっている。昨年度、大学生に対する調査では、男性 63.2%、女性 69.3%であった。また、Donatelle (1988) によると、米国の調査結果では、学部学生の正答率は 65%、大学院生 80%、大学教官 90%であると報告している⁵⁾。今回の教員に対する調査結果は、正答率が 66.3%であり、それほど高いものとは考えられない。

また、各質問の答率では、質問 1、2、10 の 3 項目において 90%を上回っており、「高齢者の大多数が認知症などの病気に罹患していないこと」、「五官がすべて衰える傾向にあること」、「高齢者では肺活量が衰える傾向があること」など病気や身体面の老化については、概ね理解されていると推測される。しかしながら、他の 12 項目では 90%を下回っており、高校や大学など教育機関における学習の機会を通して正しい老化の過程を学ぶ必要性があると考えられる。特に、質問 5 においては、

男性 50.0%、女性 52.8%で「高齢者の施設への入居」、質問 6 は男性 15.9%、女性 7.9%で「高齢者が運転をすること」、質問 12 は男性 27.3%、女性 30.3%で「高齢労働者の職場での労働の効率性」の設問に対する正答率が低く、高齢者の実態把握に誤解があるものと考えられる。これらのことについては、社会学的な領域からのアプローチが必要であると考えられる。質問 13 においても合計正答率が 44.3%で、「大多数の高齢者が貧困である」と考える傾向があるが、このことは、大学生やその他の研究結果と比較しても、同様の結果となっている。

このような傾向は、柴田（2000 年）が実施した研究でも同様なものとなっている²³。このことについては、柴田は老年学の研究が熟していない時期においては、社会の中で支援ニーズの高い障害や貧困者等の高齢者にのみが注目されるので、偏見が生まれやすい環境にあることを述べている。このことは、社会が成熟し、教育の機会が提供されることで正しい老化の過程が理解され、かつ高齢者の実態が明確となることで、高齢者に対する差別や偏見がなくなることを示唆しているものと考えられる。

教職員の中には、「老年学という用語を初めて聞きました。高齢社会となった現在の必要性から生まれた領域何でしょうか。今後、どんどん重要性が増すものだと思います。より実践的に社会制度や福祉政策などに素早く反映できるものになってもらいたいと思います」

「老いることについて少し考えました。お年寄りに対する尊敬の気持ちを常に持ち、身体的機能の衰えにはおおらかに見まらうと思っている。しかし、お年寄りのゆっくりとした行動に時に不快に思ってしまう私自身がいやになる」

「40 代という年齢を迎え、(子育てはまだスタートしたばかり)、育児(生)と老い(介護を含め)ということを日常生活の中で考えることが多くなりました。生死のベクトルで不可避な“老い”をテーマにした学問は古くて新しい学問で素敵な研究だと思いました」、などの感想が述べられており、生涯発達の視点から正しい老化のプロセスや高齢者及び高齢期について学ぶ老年学や教育老年学の必要性が示唆されているものと考えられる。

次に、高齢期に対する意識等について考察する。「今私にとって人生で一番大切なことは」については、〈家族〉と一緒に過ごすことや〈夫婦円満〉などに重点を置いていることが理解できる、〈仕事〉、〈趣味〉、〈人間関係を抜ける〉など、現在の生活とのバランスをうまく図っていることが理解できる。女性には、〈信仰〉、〈愛〉、〈子どもの成長〉など家庭を支えている表現が特徴である。

「私が 70 歳になったとき、私にとって一番大切なことは、多分」については、〈健康(や)体力〉、〈家族〉と語らい楽しく過ごすこと、〈人生を楽しむ〉ことなどが中心となっているが、〈文化の伝承〉など後世及び〈死〉など来世への思いもあり、人生の統合について考えていることが伺える。また、家族や地域の中での役割を果たすことの重要性についても触れている。

「年を重ねることで楽しみにしていることは」については、〈時間的なゆとり〉があげられており、日々の仕事から離れることで、〈家族との絆〉を強めながら、〈子どもの成長〉やく人間的な拡がり〉を期待するなど楽しみが仕事から家族など親しく身近な人々との交流を楽しみにしていることが推察できる。

「年を重ねることで最も心配していることは」については、〈子や孫の将来〉、〈健康・病気・介護〉、〈貯金・収入〉など、〈老後の人生〉について心配していることが推測できる。これらの要因は、〈環境の変化への対応〉が求められるものであり、避けては通ることのできないものである。

「もし、私の両親が自分自身の世話ができなくなったら、私は」については、〈介護(や)世話〉をすることで、自分の役割を果たすことが重要であると考えているものの、状況次第では〈家族で話し合う〉も含めながら〈デイケア・サービス〉など福祉サービスを活用しながら、老人ホームやなどの老健施設を利用することなど現実的な対応をしたいと考えていることが推察できる。

「もし、私が自分自身のことができなくなったら、私は」については、子どもや配偶者を含め〈家族で生きる〉ことの期待をもつものの、福祉を利用するなど〈施設で生きる〉などの多様な選択をしていることが考えられる。さらに、人生の延長線

上に「死」があることを実感しながら生きていることが推測できる。

「あたしが高齢者のことを考えたとき、脳裏に浮かぶ言葉は」については、ライフスタイルや家族構成など多様な要因が関係しているものと考えられるが、「家族(や)夫婦円満」、「精神的ゆとり」、「人生の統合(や)満足」、「第二の人生(や)挑戦」、「尊敬」など肯定的な要因がある一方で、「あきらめ」、「不安」、「健康(問題)」なども加わっていた。また、「介護(や)ケア(の問題)」など現実的な対応や「死(期を意識する)」など家族背景や人生経験などに関係する要因が多い。

「私は心身共に充実した生活を送るために、現在、次のようなことをしている」については、「家族との時間」を大切にしながら、「運動(や)健康」、「(将来に備えて)貯蓄」をし、「かつく趣味」に打ち込みながら「人間関係を拓ける」など「人生設計」をしていることが伺える。一方、「仕事」に夢中で、「考える余裕がない」など、多忙な職務に対してしていることが考えられる。

高齢者理解に関するアンケート調査の結果から、「老人になると肺活量が落ちる」や「多くの老人はわかり人より反応時間が長い」など生理的側面の偏見及び「多くの老人は社会的に孤立しており、また寂しいものだ」など心理的側面の偏見は弱いものの、「ほとんどの老人は若い人ほど効率よく働けない」や「65歳以上の車の運転者は若い人より事故を起こしにくい」など効率性・適応の偏見及び「老人の10人に1人は老健施設等で長期に暮らしている」や「大多数の高齢者は、政府が定めている貧困基準を下回る収入しか得ていない」など社会状況的側面の偏見が強いことが理解できる。この傾向は、大学生に対する調査においても同様の結果となっている。

また、高齢者に対する偏見形成過程について、堀(1999年)は、高齢者との交流など実際の接触が老化への偏見是正に向けて重要性を述べている。⁸⁾つまり、そのような交流や実際の接触がないことが偏見形成に大きな役割を果たすことになることを示唆しており、今後正しい情報に基づいた老人

への印象や老人観を育てるためにも教育の在り方が重要になるものと考えられる。

このような状況において、正しい老化の過程や高齢者の実態を理解し、高齢者に対する偏見是正の観点からも老年学や教育老年学の教育現場への導入は急を要するものであると考えられる。そのことが、超高齢社会を迎え、多くの人々が高齢期を経験する我が国では老人差別や老人に対する偏見の克服、高齢期を向けることの過度の恐怖を和らげることに寄与するものと考えられる。

また、生涯発達の見点を取り入れることで、高齢者の生活満足度や幸福感を高めることが推測される。

引用文献

- 1) 高齢社会白書(内閣府):
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/gaiyou/pdf/1s1s.pdf> 入手日 2011年 1月27日
- 2) 国際長寿センター:日本におけるジェロントロジー確立に関する報告書 2000.
- 3) 柴田博: アメリカ合衆国の老年学教育、老年社会科学、21(3):358-371、1999.
- 4) Maddox R、嵯峨座晴夫:エイジング大事典、p 626-628 早稲田大学出版部、東京、1997.
- 5) 柴田博:日本応用老年学会の使命、応用老年学、1(1):2-8、2007.
- 6) 堀薫夫:教育老年学の構想-エイジングと生涯学習、p25、学文社、1999.
- 7) Donatelle J. R., Davis G.L., Hoover F.C. Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH, 423 1988. Prentice-Hall, Inc. New Jersey.
- 8) 前掲書⁶⁾ p 140

参考図書

1. Donatelle J. R., Davis G.L., Hoover F.C. Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH 1988. Prentice-Hall, Inc. New Jersey.
2. 安藤進 他、老化のことを正しく知る本、東京、中央出版 2000.

平成 22 年 8 月 19 日・20 日

【老年学についてのアンケート調査】

【調査目的】 この調査は、老年学の現状について調べ、教育現場における老年学の充実を図るためのものです。調査は、全体として統計処理されます。また、調査結果は研究目的以外に使用されることはありません。

○老年学とは

老年あるいは老化を共通の研究課題として、医学、生物学、心理学、および社会学などの各分野から老年期を多面的に解明していくとともに、老年期における多様な具体的諸問題に総合的に対処するための視点の提示を目標とする学際的な研究領域である。

I. あてはまるどころの記号を○で囲んでください。

1. 性別 ①男性 ②女性
2. 学校 ①幼稚園 ②小学校 ③中学校 ④高校 ⑤特別支援学校 ⑥その他
3. 年代 ①20代 ②30代 ③40代 ④50代

II. 下記の質問で、該当する①～⑪の番号に○を書いてください。また、⑪その他を回答された方は、内容を書いてください。なお、

4. 老年学で、一番興味・関心のある内容や領域は何ですか。

- ①老化のメカニズム
- ②高齢者の生きがいや幸福感
- ③老いの意味
- ④老いの価値
- ⑤老年期の過ごし方
- ⑥生きることと死ぬこと
- ⑦高齢社会と課題
- ⑧心身の健康
- ⑨最前線の研究
- ⑩高齢者福祉
- ⑪その他()

○下記の質問5、6、7について、回答してください。(簡条書きでもかまいません)

5. あなたと高齢者を比較して、あなたが優れている点は何だと思えますか。

6. あなたと高齢者を比較して、高齢者が優れている点は何だと思えますか。

7. その他、質問や感想がありましたら、自由にご記入ください。

【高齢者について】

次の設問1～15で、正しいものには T、間違っているものには F を文末の（ ）内に書いて下さい。

1. 65歳以上の高齢者の大多数は、認知症（記憶が落ちたり、ボケたりする）である。（ ）
2. 高齢期では、耳や目などのいわゆる五官が衰える傾向にある。（ ）
3. ほとんど全ての高齢者が、性に対する興味も関心ももっていない。（ ）
4. 高齢期で、心肺機能（肺活量）が低下する傾向がある。（ ）
5. 少なくとも高齢者の10名中1人が、ナーシングホームや高齢者住宅等の長期滞在型施設で生活している。（ ）
6. 高齢者のドライバーは、65歳以下のドライバーと比べて交通事故が少ない。（ ）
7. ほとんどの高齢者は、若い人ほど効率よく働くことができない。（ ）
8. 高齢者の約80%は、通常の生活行動ができる十分な健康状態にある。（ ）
9. ほとんどの高齢者は、自分自身の考え方に固執しており、柔軟性がない。（ ）
10. ほとんどの高齢者の反応時間は、遅くなる傾向がある。（ ）
11. 大多数の高齢者は、社会的に孤立しており、孤独である。（ ）
12. 高齢の労働者は、若い労働者と比べて職場での事故が少ない。（ ）
13. 大多数の高齢者は、政府が定めている貧困基準を下回る収入しか得ていない。（ ）
14. 大多数の高齢者は、何らかの仕事を従事している、又はしたいと思っている。（ ）
15. 高齢者は、年齢とともにより宗教に興味・関心が高くなっていく。（ ）

【老後・高齢期について】

1. 今私にとって人生で一番大切なことは、 _____
2. 私が70歳になったとき、私にとって一番大切なことは多分、 _____

3. 年を重ねることで楽しみにしていることは、 _____

4. 年を重ねることで最も心配していることは、 _____

5. もし、私の両親が自分自身の世話ができなくなったら、私は _____

6. もし、私が自分自身のことができなくなったら、私は _____

7. あたしが高齢者のことを考えたとき、脳裏に浮かぶ言葉は、 _____

8. 私は心身共に充実した生活を送るために、現在、次のようなことをしている。 _____

ご協力ありがとうございました。

資料2 老年学で、一番興味・関心のある内容や領域（複数回答）

番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合計(複数回答数)
男	人数	11	23	4	9	16	16	13	12	8	7	1	120
	%	(9.2)	(19.2)	(3.3)	(7.5)	(13.3)	(13.3)	(10.8)	(10.0)	(6.7)	(5.8)	(0.08)	
女	人数	13	25	4	6	16	10	17	19	9	16		135
	%	(9.6)	(18.5)	(3.0)	(4.4)	(11.9)	(7.4)	(12.6)	(14.1)	(6.7)	(11.9)		
30代	人数	14	23	4	7	18	17	18	12	8	11		132
	%	(10.6)	(17.4)	(3.0)	(5.3)	(13.6)	(12.9)	(13.6)	(9.1)	(6.1)	(8.3)		
40代	人数	5	17	3	4	6	7	10	10	7	7	1	77
	%	(6.5)	(22.1)	(3.9)	(5.2)	(7.8)	(9.1)	(13.0)	(13.0)	(9.1)	(9.1)	(1.3)	
50代	人数	5	8	1	4	8	2	2	9	2	5		46
	%	(10.7)	(17.4)	(2.2)	(8.7)	(17.4)	(4.3)	(4.3)	(19.6)	(4.3)	(10.7)		
合計	人数	24	48	8	15	32	26	30	31	17	23	1	255
	%	(9.4)	(18.8)	(3.1)	(5.9)	(12.6)	(10.2)	(11.8)	(12.2)	(6.2)	(9.0)	(0.4)	